

編集室から

幼少の頃、梅雨というものは毎日シトシトと雨が降っていて、しかし大雨になるということはありません。その頃の記憶というものには、多少の情感が含まれているからなのかも知れません。

それにしても、最近の梅雨は降水量の変動が激しく、降らないか一旦降り出すと大雨になっている点は、この欄で何度も書いているように気候激変化の兆候のような気がします。

地球上、日本列島が最も季節変動が大きく、かつ気候変動の影響を受けやすい場所なのかも知れません。ほかの国は未だこれほどの変動に晒されていないようですが、一旦彼らの土地でも変動が大きくなった場合、その影響は日本のそれとは比べ物にならないことでしょう。

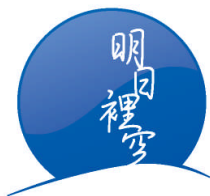
一つは、元々多様な天候に晒されてきた日本列島では、地勢・植生が既にある程度対応されていて、森林の保水能力はかなり大きいものがあります。一方海外のそれらは何れもそれほど豊かではなく、より大きな災害につながり易い状態ではないかと推察しています。

さらに、人。元々災害の多いこの国の人々には、災害に対する心の備えというものが暗黙に為されていて、いざという時にそれが発動されているのではないかと思います。3.11の際も冷静に対応する日本人に触れた外国人が「まるで兵士のようなだ」と唸ったといえます。

ところが、海外では元々災害が殆ど無い地域が大多数です。心に備えができるはずがありません。恐ろしいのは災害だけでなく、群集のパニックによる、その派生拡大です。

夏になると悲しい事故が報じられますが、その多くは、事故・災害への心構えを失ったとしか思えない行動に由来しているようです。

最悪の事態は、それをリスクと把握できない心の隙間から生まれます。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川島さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川島さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマン
ション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術
者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、
計画マンがどのようなことを考えているのか
などに触れて、少しでも業界を知っていただ
ければと考えて編集しています。

2014/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2014/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

景月



若狭にて
by hama

演のつばやき 『促進』

世の中が複雑化・高度化するに伴い、それに対応あるいは乗り越えるために立案・実施されるプロジェクトも高度化している。

そして、当然のようにプロジェクトの立案・実施のさまざまな段階で繰り返される会議・会合の場での議論も、複雑化・高度化する。ところが、高度化して議論の行く末にプロジェクトの命運が掛かり、その先に世の中がつながっているから、一回の議論と言えども、求められるその成果と効率の大きさは昔に比べて格段にレベルが高くなっている。

つまり、時代に求められている革新は、技術や理論ばかりではなく、日常的に繰り返されている「話し合い」に対しても厳しく要求されているのが、現場の実情だ。ところが、阿吽の呼吸・以心伝心・当意即妙といったコミュニケーション術を旨としてきたこの国の文化風土では、議論の進め方を革新させる要求は最近まで放置され続けて来たのではないだろうか。

議論の場を効率的に進める技術は、海外で発見されスキル化された。その技術をファシリテーションという。欧米の古言語であるラテン語で「芽吹かせる」という意味のファシルを語源としている。人々の活動が容易にできるように支援し、うまく運ぶように舵取りすること。中立的な立場でチームのプロセスを管理・制御して、チームワークを引き出し、その成果が最大となるよう支援する技術。つまり話し合いの促進役である。最近では、街づくりなどの現場で、馴染みになってきた言葉だ。

この技術を駆使して話し合いの場を的確に進行する役をファシリテータという。ファシリテータは、これまでの議長役・議事進行役とは全く異なる点がある。それは「議論のプロセスを制御するが、結果は制御しない」という点だ。

国会や県・自治体の議会を観察していれば分かるが、議長・座長が議論の結果を左右（制御）している。純粹な議論の進行役と意思決定権者が同一であるのは、株主総会・役員会を筆頭に企業・組織の会議の特徴でもある。ファシリテータは、これらの従来のあるり方と完全に一線を画している。ファシリテータには基本となる四つのスキルが求められる。

- ・ 場を創り・つなぐ「場のデザイン力」
- ・ 受け止めて・引き出す「コミュニケーション力」
- ・ かみ合わせて・整理する「分析・構造化力」
- ・ まとめる・納得して決める「合意形成力」

である。ファシリテータは、これらのスキルを駆使して「みんなが納得する（話し合いの）場をどうやって創り出すか」に腐心する人である。

「場のデザイン力」は、どのように場を創り・つなぐのか。

まず最初に、アイスブレイクという手法で話しやすい雰囲気を作っていき、場を和ませメンバーの主体的な参加を促すために緊張をほぐす活動だ。

次に、目的・目標を設定・合意し意識を合わせてゆく。どのような主旨で会議を開催するのか（目的）。何時までに何処まで議論するのか（目標）。誰がどんな役割を

担うのか（役割）。進行の大まかな手順と時間配分（進め方）。他人の意見を否定しないなど議論の場の約束事（ルールと方針）の五つを提示して参加者の意識を合わせていく。

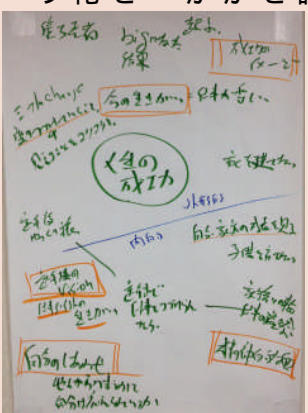
この時、意外に重要な点は、議論の進め方について参加者全員の同意をとることだ。進め方自体に不満があると、それが募って議論が活発化しないばかりか、最後の合意形成の段階でいわゆる「ちゃぶ台返し」が起きかねない。これらの上に、議論を充分に発散させて多様な可能性を引き出してから、その収束を図るという手順を丁寧に踏もうとする意識がファシリテータには求められる。

「コミュニケーション力」で、参加者の意見をキチンと受け止めて・引き出すのに、最も重要なことは、傾聴で安心感・信頼感をつくることだ。傾聴とは聞き手の意識を話し手の中に置き、単に言葉（音声データ）として聞くのではなく、言葉に隠された相手の意識を聞き取る技術だ。さらに議論を拓げるには、質問で意見を引き出す技術が要る。傾聴と質問会話は、カウンセラーの基本技術でもあり、両者に共通している点が興味深い。

最初に合意された進行手順から逸脱するような意見や他人への批判めいたものが出たとき、柔んわりとそれを退け議論を元に戻す技術もファシリテータには重要だ。

多様な議論・提案が出される過程ではときに話がかみ合わず、混沌とする場面に陥ることがある。この時、すかさず話を整理して場を混沌から離脱させるのが「分析・構造化力」だ。

日本人の気質・文化の影響もあり、話とはかく曖昧になりやすいが、それを明確化・具体化することが第一歩。議論の全体像をつかみ、話し合いの進展の構造を同時進行で分析しながら整理し、多様な視点からの議論を進めること。「見えない」話を図解を活用して議論を可視化することもファシリテータの役目だ。



十分に話し合いが進み、これ以上は話が発散しないと見極めた時点で、これまでの内容をまとめ納得して決める「合意形成力」の出番となる。

合意を図ろうとする際、障害となると思われているのが対立意見の存在だが、ファシリテータはこの対立をチャンスと捉える必要がある。対立意見の中に隠された「言葉の奥の本音」を探り、参加者間で共有させる絶好の機会なのだから。その上で、適切な対立解消法を選択・活用して、より質の高い合意へと導いてゆく。

ファシリテーションの技術は、会議やワークショップの場だけで活用できるものではない。広く話し合いの場で「使える」技術である。だとしたら、最も多く実践できる現場は、おそらく家庭だろう。

ところが、家庭での対話には家族に対する甘えの意識が潜んでくる。この意識が、家庭内でのファシリテーション活用を難しくしているのではないかと、自身を振り返っている。

かつて湖沼では、琵琶湖に次ぐ我が国第2位の面積を誇った八郎潟。戦後の食糧難から米の増産計画が持ちあがり、八郎潟干拓が計画された。1957年に干拓事業に着手、1964年10月1日に大潟村は発足した。1967年から1978年までに全国から589戸が入植した。

大規模モデル農村として誕生した大潟村であるが、1970年から始まった米の生産調整（減反）に対し、村内で減反順守派と減反非協力派の対立構造が激しい時期も経験した。この農政を巡る問題は別にしても、ブランド米「あきたこまち」の特産地としての大潟村の知名度は抜群である。10月の第1日曜日に開催される「新米まつり」には、人口3,300人の村に8,000人が訪れる。とかく「大潟村」イコール「米」のイメージが強いが、大潟村には様々な注目すべき点がある。

人口が維持され持続可能？

厚生労働省社会保障・人口問題研究所の予測に輪をかけ、日本国内を震撼させた「日本創生会議」の人口予測。2040年までに20～39歳の女性人口が秋田県25市町村のうち大潟村を除く24市町村で半減するとした。北東北で唯一、大潟村は女性人口が15.2%と増えると試算された（実際、女性の年少人口14.5%は秋田県内市町村で最も高い（2010年国勢調査））。秋田県は農業とりわけ米依存が高く、農村部を中心に人口が激減していることから「秋田の人口減少の要因は米だ」という秋田県知事の発言（本年6月12日定例会見）もあったが、大潟村は総人口もほぼ横ばいで農業者は微減してきているものの後継者も多く、秋田県の農村部では一番収入が多い。また、村は単一の集落であること、全国から集住し独特のコミュニティが形成、維持されてきたことも要因であろう。

東日本大震災復興と新市街地建設

現在は日本総合研究所の藻谷浩介氏の提案で被災地に「農地と居住地を分ける」という通勤型農業」という観点から農地や農村集落の整備のヒントにと、東日本大震災被災市町村の視察受け入れを地震が起きた2012年度に実施した。

「桜と菜の花まつり」の集客力と知名度

村では農業に次いで、観光に力を入れている。イベントとして最大の集客を誇るのは「桜と菜の花まつり」（ゴールデンウィーク期間）であり、約9万4,000人が訪れる。圧巻は11kmにわたる菜の花ロードと桜並木で、沿道には車の駐車が絶えずいままや、秋田県内の花見報道や情報番組では、欠かせない場所になっている。

男鹿半島・大潟ジオパークとバードウォッチング

ジオパークは地球の歴史を学び、大地を楽しむことのできる「大地の公園」とされ、貴重な地形、地層、温泉などが多く含まれることが多い。八郎潟の干拓で誕生した大潟村も、男鹿半島（寒風山、入道崎など10サイト）とセットで2011年9月に「日本ジオパーク」に指定され、かなり珍しいジオパークになっている。

村には「野鳥観察ステーション」が日本最初の国設「大潟草原鳥獣保護区」の中にあり、約200種類の野鳥が生息している。このステーションだけでなく、村のいたるところで全国からのバードウォッチャーの姿が見られる。

このように「干拓地」や「人工的な集落や自然」が生み出したものが相まって、独特の魅力を形成している今日の大潟村である。

目黒に「能登の夜市」をオープンさせたのが2011年3月。そこから、恵比寿の「な>樹」の経営権を買収し、昨年には渋谷に“日本酒の持つポテンシャルを若い方にも伝えたい”と考へ「日本酒バルChintara」を開業しました。そして今年7月に、新たな試みとして第三者資本にコンサルとしてはいらせていただき、麻布十番に富裕層向け飲食店「かなざわ」をオープンする運びとなりました。

ちなみにこの「かなざわ」のメニューの一部をご紹介しますと

- ・能登のお刺身三点盛り 4,000円
- ・和牛炙り雲丹添え 7,000円
- ・海鮮土鍋ご飯 4,000円
- ・クリュッグロゼ(シャンパン) 85,000円

という何とも目が飛び出る価格帯です。もちろんそれだけの素材を使っているのですが、そうだとすると僕から見ても高いですよ。オープンして約10日ですが、お客様の平均単価はなんと約3万円です。

このように書くと「おっ、とうとうセレブ相手に金儲けか!？」なんて思う方もいるのですが、この富裕層向け飲食ビジネスというのが非常に難しい取組な訳です。

その理由を列挙しますと

お金持ちはすごいわがまま

そのお金持ちの相手ができるスタッフは簡単にはみつからない

見つかったとしても採用単価が非常に高い

経営者にもお客様と同等の見識が求められる

の4つでしょうか。

については、世界のあらゆる美味しい物を召し上がってきている方なのでお料理で唸らせるのは至難の業です。また、サービスについても店の雰囲気やスタッフの言葉・心遣いの細かなところまで高いレベルのものを求めてきます。先日もお客様から、スタッフ間でのコミュニケーションがガサツだと指摘され、怒って帰られました。はこのようなお客様相手に億さずに接客または、お料理などでの価値提供ができる人間が非常に限られているということです。銀座、赤坂、六本木の料亭や会員制バーなどに働いた経験がないと、一般の飲食店レベルの気の利いたサービスをしてくれる兄ちゃん、姉ちゃんレベルでは務まりません。はの結果で、そのようなスキルがある人間を採用するとなると通常の2倍から3倍はかかります。そして一番痛烈に私を痛めつけたのが でした。いらっしゃる方は外食に年間1000万円以上使われている方が多く、この方たちのライフスタイルを理解し、その上で、その店の強みを発信するとなると、私のような庶民ではとても想像つかないことが多いわけです。

「富裕層ビジネス」は景気回復基調においてまた注目を浴びてくるとは思いますが富裕層の考え方、価値観・倫理観、抱える悩みと孤独、そして何を求めているのか?を理解する、つまりマーケティングしていくには、その人間もまたそのような世界での経験値がないといけないのではという結論にいたりしました。創造するために想像するという点で、その想像ができないのです。大衆向けとは違い、一人当たりのお客様への依存度(生み出す利益)は非常に高く、またマーケット規模も限られているため可能な限り全てのニーズを満たさないと、固定客にはなっただけでありません。なんと難しい商売。。。。

僕らの会社は大衆向けでがんばろ!!

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

~ 小山町でのお話 ~ 静岡県小山町経済建設部専門監 溝口 久

富士山の麓にある小山町に来て初めての夏を迎えている。4月当初の寒さは5月まで及んだが、その分夏は涼しい。住まいは役場北側の和田坂と名付けられた坂の途中にある。小山町の経済の礎をつくった富士紡績の社長和田豊治翁の名前が付けられている。我が家は町が買い上げたその工場長宅「六合山荘」である。茅葺の屋根に金属屋根がかぶせられていて、ヤモリも同居する古い家だ。7室もあり洗面所と家事室にはトップライトがついている。洗濯機、レンジ、トースター、掃除機、炊飯器、書棚、食器棚から器、鍋、そして客布団まで役場の皆のご厚意によって提供していただき、一人所帯には到底思えない充実ぶりとなっている。



町長からは「この家を交流の場に使うよう」に指示が出ている。4月には早速、東京、神奈川、県内各地からお越しいただき町長、職員含め25人ほどでそば会を開いた。その時にお越しいただいた東海大学の杉本教授には町のアドバイザーになっていただき、町内の公園の再整備計画や観光振興策について6月にはプレゼンテーションもしていただいている。昼時には職員4,5人でほぼ毎日、昼食を囲んでいる。この時期になってくると素麺が人気だ。トッピングのキュウリ、トマト、ハム、ミョウガを刻み、錦糸卵をつくる。食事をしながら仕事上の課題について皆で意見交換したり、まちづくり関係や“ななつ星IN九州”のDVDを見ることにしている。8月には大学のインターンシップ生を受け、宿には我が家を提供することにしている。

さて、役場では経済建設部専門監という職名をいただいているが、関係する課長は10人、部をまたいでおり、実態と合わなくなっている。町長からの特命事項を担当課長と打合せしながら実現に向け道を拓くことが小生の役割だ。健康福祉会館、役場エトランス部のリニューアル、足柄駅のコミュニティセンター化、足柄温泉のミニ道の駅建設、須走小学校校舎増築、南藤曲宅地造成設計施工一括発注、金時公園・誓いの丘の再整備、NPO活動支援、観光振興計画、景観計画策定、どぶろく特区、企業誘致、こんなところが具体的な仕事だ。これまで県庁、由布院、豊岡村で体験し学び得たことに人的ネットワークを加え、全能力をフル動員して仕事に臨んでいる。

最近道筋がついた仕事に「南藤曲宅地造成事業の工事請負に関する包括業務指名プロポーザル」の実施がある。行政の仕事で設計施工一括発注は、

殆どされたことはない。少なくとも県内に事例はなかった。でも、町長からひと言「設計施工でやった方が安いだろう」の一声に後押されるように、実施に向け走った。

小山町では「富士のふもと 人々のふれあう 心豊かなふるさと・おやま」を実現するために、生活基盤である「住まい」について、新しい住まい方として、生活と自然が調和する「家・庭一体の住まいづくり」を進める。これがこの住宅地の理念だ。5,500㎡の土地に16宅地ほど配置した設計図を描き、開発行為の申請、土地の筆の整理まで含めて6,000万円、これにモデルハウスを自社で建築することまで求めているのだから少々無謀かなと思いつつも実施要領をつくった。

5社指名2社辞退、応募してきた残る3社の内2社は予算オーバーで失格。結局1社が残りプレゼンテーションを受けた。趣旨に沿う満足度の高い提案が出されたことで一つのことが進んだ。予算内に収めるように設計内容をコントロールしながら今年度末の完成を目指すことになった。“憧れの住宅地”にするために、分譲時には建築協定やデザインガイドライン、建築に関する補助金、お奨めの設計事務所・工務店の紹介といった踏み込んだものを提供したい。毎回前月比マイナスの町の人口にちょっとでもストップをかけるのが使命なのだ。

景観計画策定も急いでいる。世界文化遺産になった富士山の周辺の景観を整えるのは急務だ。お隣の御殿場市も裾野市も景観計画が策定され景観条例が施行されている。小山町の郊外の景観は実にいい。住宅地と道路の境界部の石積みや植栽が美しい。田の法面にも花が植えられ、あじさいも咲く。この美しい景観を末永くあり続けたい。こと細かいルールを決めるであろうが、今見られる町の建築作法であれば制限されることはない、突出した悪のみを抑え込めばそれでいいのである。

仕事については書くことがたくさんある。今回はほんの一部だ。また、時々紹介させていただきたいと思っている。

富士山、富士スピードウェイ、富士霊園が、町が世界に誇れる観光資源だが、知の観光も少しでもできれば願っている。そうそう、小生が由布院観光総合事務所にいた時には「視察観光の町ゆふいん」と豪語していたなあ。

皆様、どうぞ富士山の裾野「小山町」にお越しくださいませ。お構いしませんよ。

